

## VII-3

当院にて血縁者間同種ミニ移植を施行した多発性骨髓腫の 3 例

杉本由香、西井一浩、片山直之

三重大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科

【目的】若年初発多発性骨髓腫(MM)例の治療として、自己末梢血幹細胞移植が第一選択とされることが多い。しかし、自家移植では生存曲線はプラトーにならず、GVM 効果が期待できる同種移植が唯一根治を目指す治療として考えられている。今回、当院で自己末梢血幹細胞移植と同種ミニ移植をタンデムで施行した MM 例を報告する。【結果】VAD 療法での寛解導入療法後、L-PAM 大量療法を前処置とした自己末梢血幹細胞移植後に寛解状態を確認し、Fludarabine+L-PAM を前処置とした血縁者間同種ミニ移植を施行した。症例は 3 例の MM (stage 3)で、52 歳男性、IgD- type、59 歳男性、IgA- type、54 歳男性、BJ- type であった。いずれの症例も移植後 extensive type の慢性 GVHD が出現し、骨髓中の形質細胞の増加は認められなかった。 の例は移植後半年で、形質細胞腫(PC)の増悪を認め、その後敗血症で死亡した。 の例は移植後 1 年で PC の形で再発したが、局所放射線治療および Thalidomide の内服にて、移植後約 3 年半経過した現在も有病生存中である。 の例は移植後約 1 年半、無治療生存中である。【結論】これら 3 例はいずれも同種ミニ移植後、骨髓での MM の再発は認められず、GVM 効果が推測された。また、PC として 2 例が再発したことは興味深く、今後、PC の発症機序を含め、MM の治療法としての同種ミニ移植について、更なる検討が必要であると思われた。